

まえがき

我が家には薪ストーブがある。燃やす木は、山から伐ってきている。昔なら、ありふれた、たったこれだけのことだが、木を伐り、薪ストーブを使うようになってから、我が家、そして私自身に大きな変化、新たな世界が訪れた。それは、けっして、ノスタルジックなものではない。

人間というものは、多かれ少なかれ、その時代の社会に馴らされるものである。生れた時にあつたものは、大昔からあつたように思うし、それが、当たり前だと思つてしまふ。しかし、それらの多くは、近年になつて現れた人工物である。この数十年、そのような人工物の出現と蔓延による、社会の変化は、激しさを増している。人間というものは、太古の昔から、そう変わるものではない。社会の急激な変化の中で、人々の悲鳴のようなものが聞こえる気がする。

そのような世の中にあつて、薪ストーブは、小さな扉を開けてくれた。そこからは、現

代社会が失ったもの、失いつつあるもの、忘れていたもの、目には入っていても見えなかったもの、意識はしなかったが、本来兼ね備わっているもの、その世界に身を置かないと見えないもの、等々、実に多くのものが満ちた世界が広がっていた。それは未来への扉であった。